

# 瑞王寺古墳

福岡県筑後市西牟田所在古墳の調査

筑後市文化財調査報告書

第3集

1984

筑後市教育委員会

# 瑞王寺古墳



瑞王寺古墳出土珠文鏡

筑後市教育委員会

## 序

八女丘陵一帯の古墳群は、その規模の大きさや学術的な意義において全国でも数少ないものの一つと言われてきた。

この度、その古墳群の西端、石人山古墳のさらに西へ五百メートル余りの位置の、何の変哲もない孟宗竹の生い茂る藪が古墳であることが明らかになった。これが瑞王寺古墳である。

早速、昨年の秋発掘の許可を受け、地権者の快諾も得られたので、この一月五日から作業に入り、関係の皆さんの協力のお陰で、予定通り一月末に発掘作業を完了した。

この間、終始陣頭に立って作業を進めて戴いた県文化課の川述昭人先生の、文化財に対する温かい愛情と、発掘への熱意に心から敬意と感謝の辞を捧げなければならない。

ここに、無事発掘作業を終了し得て、御援助下さいました国県市各関係の皆様に御厚礼申し上げつつ、その全貌を御報告申し上げる次第である。

昭和59年3月31日

筑後市教育委員会

教育長 中島 栄三郎

## 例　　言

1. 本書は、福岡県筑後市大字西牛田字松尾に所在する古墳の緊急発掘調査の報告書である。
2. 調査は、昭和58年度の国庫補助を受けて、筑後市教育委員会が実施し、福岡県教育委員会の援助を得た。
3. 遺物整理は馬具等の鉄器類保存処理を九州歴史資料館の横田義章氏、土器を福岡県教育委員会岩瀬正信氏の指導のもと九州歴史資料館で行った。写真撮影は遺構を川述昭人、遺物は九州歴史資料館の石丸洋・平島美代子氏が撮った。遺物の実測は川述が行い、埴輪の一部を須山富子氏が実施した。遺構・遺物の製図は豊福弥生氏が担当した。なお鏡の拓影は岩瀬正信氏に、鏡に付着した布、紐の顕微鏡写真撮影は横田氏にお願いした。
4. 本書の執筆と編集は川述が行った。

## 本 文 目 次

I は じ め に	1
II 位 置 と 環 境	3
III 調 査 の 内 容	4
1. 墳 丘	4
2. 石 室	9
3. 出 土 遺 物	9
4. 小 結	22
付録 石人山古墳出土遺物	25

## I はじめに

昭和58年10月当該地を訪れた筑後考古学研究会のメンバーは、古墳を含めた周辺部の伐採作業が進められており、さらに古墳のすぐ近くには工事用のエンボが準備されているのに驚いた。事業計画としては墳丘を削って個人の住宅をその跡地に建てると言うことであった。古墳が崩壊の危機に面している旨の連絡を受けた筑後市教育委員会は県教育庁南筑後教育事務所と連絡をとり、10月17日の午後現地において土地所有者を含めた三者協議を行った。

その結果、発掘調査を実施して記録保存するという事になり、調査時期については後日を期した。その後、国・県・市による折衝を経て、58年度の国庫補助事業として発掘調査を実施する事となった。調査は昭和58年1月5日から1月28日の間で一応終了を見た。2月5日現地説明会を開催し、200名を越す多数の熱心な参加者を得た。翌6日から墳丘の盛土を除去しながら石室の石材取り出し作業と地山面の検出作業を行い、調査を終了した。調査関係者は下記のとおりである。

調査責任者	筑後市教育委員会	教 育 長	中 島 栄三郎
同		社会教育課長	吉 住 裕 昭
同		同 係長	橋 本 益 夫
同		吏 員	松 尾 恵美子
同		同	河 津 カツエ
同		同	黒 田 洋 一
同		同	野 口 明 美
同		同	光 延 久 幸 <small>(文化財担当)</small>
同		同	田 中 敬 士
調査担当者	福岡県教育庁南筑後事務所	技 術 主 査	川 述 昭 人
調査補助員			佐 土 原 逸 男

このほか、福岡県文化財保護指導委員の木附光雄氏から指導・助言を頂いた。鉄器の取りあげについては九州歴史資料館学芸員横田義章氏にお願いした。墳丘測量等については県文化課調査二係技師伊崎俊秋氏、南筑後教育事務所主任主事沢田俊夫氏の援助を頂いた。なお、調査中は多忙な仕事のあい間をぬって筑後考古学研究会の江口寿高氏の協力を頂いた。また久留米市文化課松村一良氏には種々御助言を頂いた。付編とした石人山古墳出土遺物については筑後市西牟田在住の木下恒夫氏が永年に亘って採集された基重な品物であり、今回、報告書で紹介する事について心よく承諾して頂いた。

土地所有者の下川ミ子氏をはじめ関係各位（社会教育係のほか体育係長木村伸道、吏員村上一彦、同田中純彦、主査津留忠義氏の参加を得た）、諸氏・諸兄、ならびに作業に従事された方々の協力により調査を終了することができた。ここに記して感謝の意を表します。



1. 十連寺古墳 2. 十八銭亀遺跡（江戸時代） 3. 長原山遺跡（弥生時代）  
**4. 瑞王寺古墳** 5. 一藤町囲（江戸時代） 6. 鯉ノ谷遺跡（弥生時代）  
 7. 石人山古墳 8. 弘化谷古墳 9. 羽大塚町囲（江戸時代）  
 10. 前津遺跡（弥生時代）

### 第1圖 遺跡位置圖 (1/25,000)

## II 位置と環境

瑞王寺古墳は福岡県筑後市大字西牟田字松尾に所在する。

当該墳は福岡県遺跡等分布地図（大川市・筑後市・三瀬郡編、1979）には記載されておらず立山山古墳群（八女市文化財調査報告書1983）の調査報告書に瑞王寺古墳として記載されている。遺跡の名称は、当該墳のそばに同じ名称の建物があったことから考古学関係者の間で、瑞王寺古墳という通称を用いているため、これを踏襲した。

筑後市は福岡県の南部、筑後地区のはば中央部に位置し、久留米市へは北へ12km、大牟田市へは南へ21kmの距離にある。筑後平野を南北につなぐ国道209号線添いに発達した市街地は、江戸時代の宿場跡や集落、一里塚等の名残をわずかにとどめている。

三潴郡三瀬町西牟田を西端とし、東は八女市豊福・立山を経て、山内付近までを含めたいわゆる八女丘陵（10km強に及ぶ）の西側の端部付近に古墳は位置している。この八女丘陵には、西から石入山古墳（当該墳の東方約1kmに位置する）・神奈無田古墳・筑紫の君磐井の奥津城である岩戸山古墳・乗場古墳・善藏塚古墳・鶴見山古墳・釘崎1・2・3号墳・立山丸山古墳等の前方後円墳が点在する。さらには5世紀初頭から6世紀中葉にかけての古墳27基が調査され、陶質土器や古式の須恵器、多数の形象埴輪や垂飾付耳飾を出土した立山山古墳群があり、東の端部には6世紀末頃に比定される巨石古墳で有名な童男山古墳が所在している。

西北方向2kmの八女丘陵西端部には十連寺古墳（福岡県遺跡等分布地図には清導寺古墳として記載されている）が所在する。これを境に丘陵は終り、有明海まで標高5m以下の低地が広



第2図 筑後將士軍談にみる石入山・瑞王寺古墳

かる。十連寺古墳は現在墳丘中央部付近を遺存するのみで半壊に近い。主体部も一部崖面に露出しているが詳しい年代は不明である。墳丘の形も円墳、もしくは帆立貝式の前方後円墳と言われ定かでない。従って現在の所、瑞王寺古墳が調査の行なわれた西端近くの古墳であり、地理的に重要な位置を占める。石人山古墳の東方わずかの位置には6世紀中葉に比定される弘化谷古墳がある。これは当該墳をひとまわり大きくした規模の直径約35mの円墳であり、装飾古墳であることが確認された。

当該墳と石人山古墳を結ぶ中間の位置の丘陵頂部には墳丘をほとんど削平された円墳が所在する。これは径約25m程のものと思われ、内部主体は不明である。ここからは6世紀末頃に比定される須恵器を採集している。

第2図は筑後将士軍談に記載された石人山古墳と道路を挟んだ西側に「石人ヨリ二丁余」とある塚はその位置関係から当該墳の記述と思われる。

### III 調査の内容

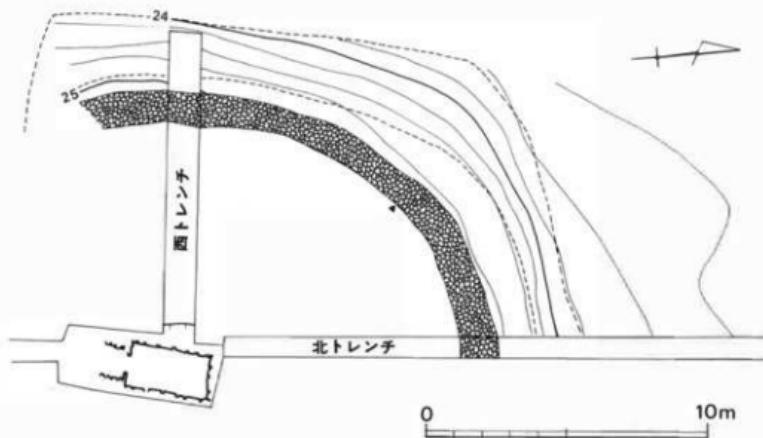
#### (1) 墳丘(第3図、図版1~2)

古墳は低丘陵上の頂部に営まれており、墳丘の東側半分は採土のため現存しない。また、南西側の墳丘も住宅建設の際に削られており墳丘は土壘を遺存するにすぎない。墳丘頂部には最近まで御堂が建っていたと言われ、調査時にもその基礎工事のコンクリートの匂いが発見されている。現存する見かけの墳丘は南北径24mを測るものであった。

盛土の方法は北側トレンチでは石室の中心から4.7mの位置(奥壁床面から3.35m)に第1段階の土盛りの端部がくる。この位置から石室方向へ石室の構築と同時に細かい単位の盛土を行っている。盛土は一部旧表土を残したまま高さ95cm程度積まれている。第2段階としては、さらに外方に幅2.9m、高さ85cmの盛土を旧表土上から行っている。第3段階ではさらに外方3.75m(石室中心から11.4m、奥壁床面から10.1m)の位置まで盛土が行なわれる。盛土の範囲はこの位置までであり、この部分には自然石を用いた葺石が巡る。葺石上面から墳丘外側にかけては墳丘の流出土が堆積しているが、築造時にはこの部分は盛土ではなく、地上整形による平坦面(外方へ若干傾斜する)が長さ1.6m程確認された。西側トレンチでは、石室中心から3mの位置に石室を覆う第1段階の盛土が見られる。石室の掘り方は中心から1.8mに位置している。第2段階では石室中心から9.85mの位置まで厚さ20cmの黒色土(旧表土ではない)を広範囲に敷きつめ、石室中心から5.1mの位置から内側部分のみさらに盛土する。第3段階は石室中心から10mの位置まで盛土し、この部分には葺石最下段部の石材が位置している。この様に盛土は石室の構築と並行してまず中心部を行い、順次外方へ盛土を行っている。墳丘の基盤は南北方向は平坦であり、西側方向は墳裾へ自然傾斜している。南北方向では墳裾近くの1.5m



第3図 地形測量図 (1/200)



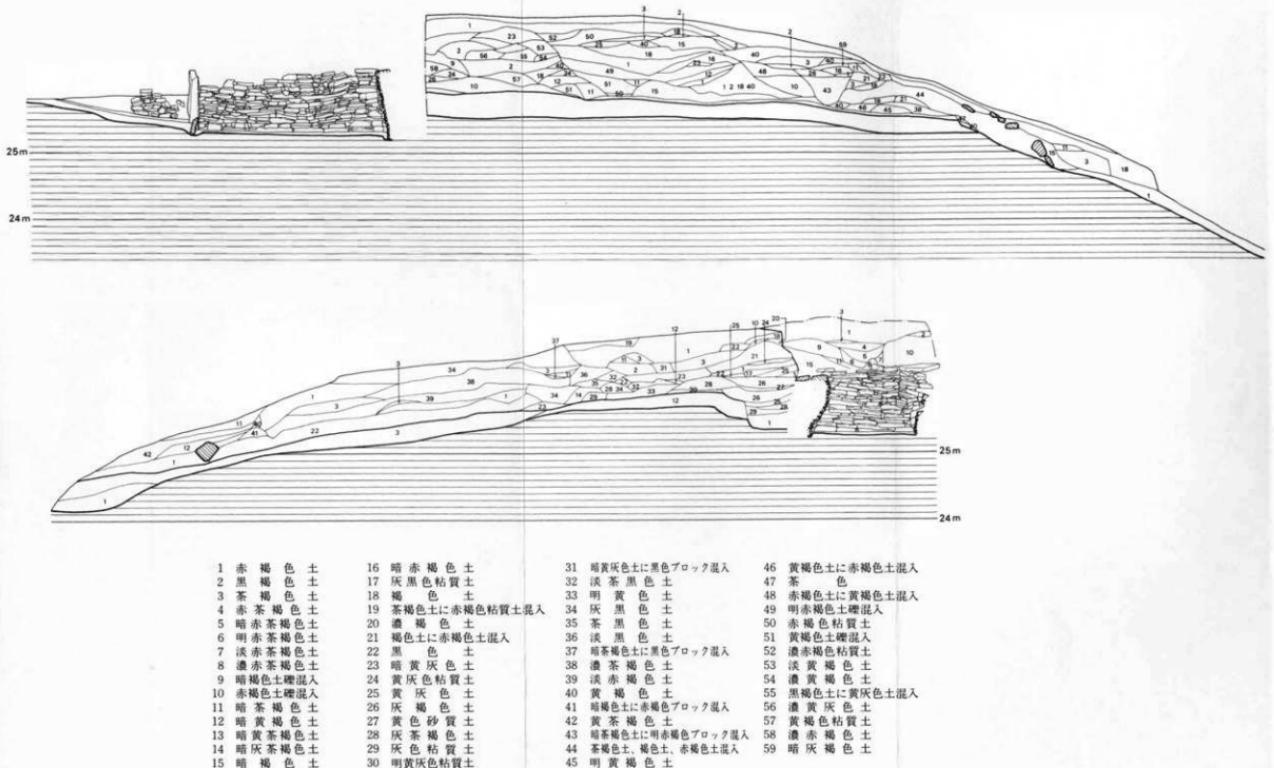
第4図 地山面地形測量図 (1/200)

の範囲を地山整形して低くすることにより盛土は1mながら比高差を2.25mと高くしている。西トレンチの基盤の高さは、掘り方端部と墳裾部では1m程の差を有する。

葺石は墳丘土の範囲で検出した。葺石は自然石を用いたもので、墳丘の中心から10mの位置に裾石を置き、幅1.4m、高さ90cmのドーナツ状に巡らすものである。石の葺き方は最下段部に長さ30cm、幅15~20cm大で葺石石材のうち最も大き目のものを用い、上段部は15cm大の石材を用いる。葺石の最下段部の石材は北半部は横長く、南半部は縱長く使用していて、その境部は明瞭である。これは南と北側部とでは葺石を葺く作業者の違いとして考えられよう。

周溝は検出されなかった。周辺部はすべて開墾されていたため、築造時に所在していたか否かについては不詳であるが、所在した可能性が強い。

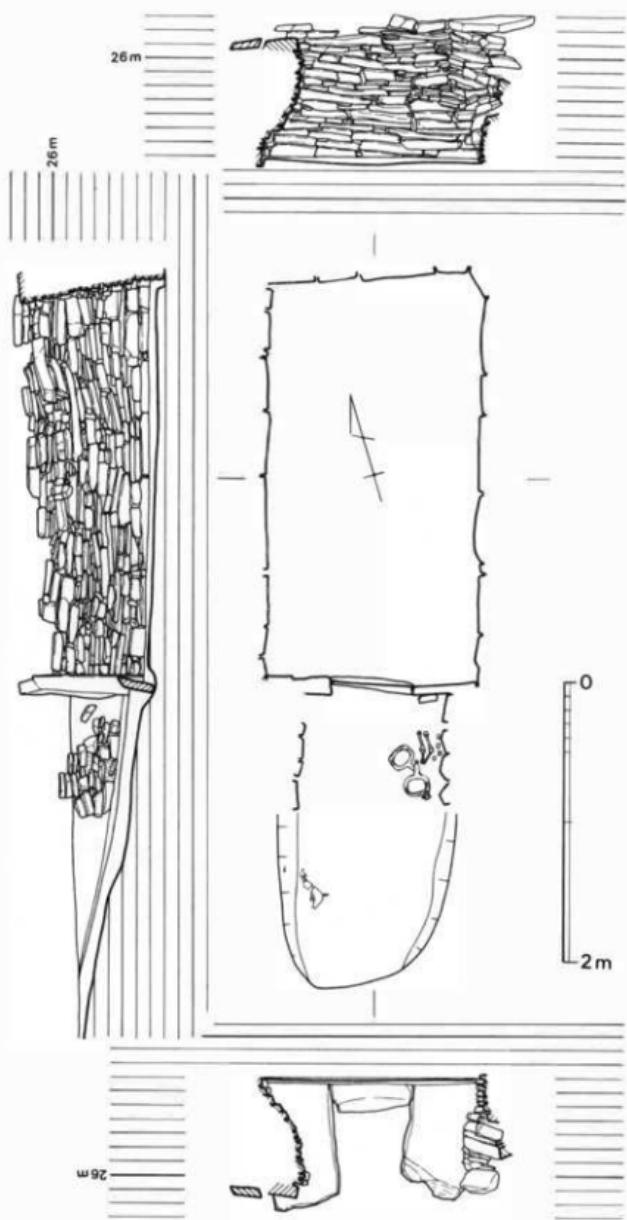
現在する葺石から墳丘の中心を求めるに石室奥壁の中央部から40cm北側にはずれた位置となり、葺石外周部の直径20mを測る。葺石より外方には地山整形の平坦面を有しており、この平坦面の端部を墳丘裾と考えれば直径26m程となる。



第5図 塙丘土層図 (1/60)



第6図 蒼石実測図(1/80)



第7図 石室実測図 (1/40)

## (2) 石室(第7図、図版3~5)

内部主体は主軸をN-15.5°-Eにとり南南西に開口する豊穴系横口式石室である。

玄室の平面形は長方形を呈しており、規模は主軸長2.8cm、中央部幅1.53m、現存壁高1.05mを測る。奥壁は最下段部に幅25~55cm、厚さ5~10cm大の片岩を平積みにして17~20段程積む。奥壁の内傾度は10度とゆるやかである。石材の規模は下段から上段まではほぼ一様の大きさであり、際立った差は見られない。側壁と奥壁との接合部分は石材を側壁、奥壁の両方にまたがるように架構している。壁面のすき間に小片の石材を詰め石として用いる。側壁の右壁は盜掘時に石材を抜かれており遺存状態は悪い。左壁は最下段部に8個、右壁は7個の扁平な石材を置く。壁面を形成する石材は奥壁・両側壁とも同一規模のものである。左側壁は、松の木(樹齢40数年)の直根により、石室内側へかなりせり出している。床面はほぼ水平であり、地山上に厚さ3cm程砂利まじりの土を敷いている。玄室内面の3壁はすべて赤色顔料を塗布しており色鮮やかである。また床面も全面真っ赤である。

袖石の左側は長さ46cm、床面からの高さ90cm、厚さ13cm程の板状石材を縦長く据え、右側は、長さ45cm、床面からの高さ85cm、厚さ8cmの板状石材を据えている。横口部の幅は57cmを測る。袖石の石材は床面より40~50cm程うめ込まれている。なお、この石材は側壁と接する部分を除く3面に赤色顔料を塗布している。

樋石は長さ57cm、厚さ6cmで、玄室床面からの高さは20cmである。

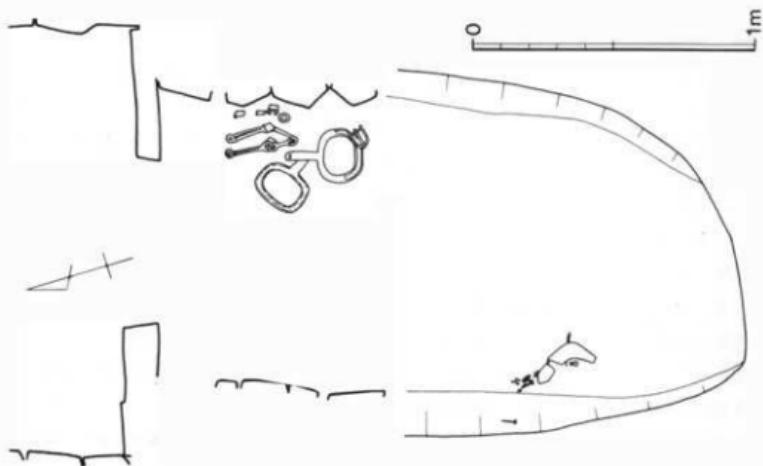
墓道には左・右壁とも石積みが見られる。これは左壁では長さ85cm、高さ45cm、右壁では長さ80cm、高さ75cmを測る。この石材は玄室の扁平な板状のものと異なり、やや厚手の石材を用いる。空間部には白色粘土の目詰が見られる。この部分の壁面には赤色顔料は見られない。墓道はこの石積み前面からさらに1.25m程確認された。中央部幅は1mを測る。墓道の床面は玄室方向へ下降しており、墓道入口端部と横口部分の床面は35cmの比高差を有する。墓道床面は地山上に厚さ7~8cm程片岩のまぎった砂礫土を敷きつめている。床面より15cm上方には一層があり2次床面かと思われる。墓道の床面と玄室床面は10cmの比高差を有している。

閉塞に用いられた石材は何ら検出されていないが横口部周辺に石材小片の散乱が見られないため板石1枚程度の閉塞石であった可能性が大である。

## (3) 出土遺物(第8~16図、図版7~13)

### 遺物出土状態(第8図、図版5~6)

玄室の床面直上まで周壁の石材が落ち込んでいた。この石材を除去すると、赤色を帯びた砂利層の床面が検出された。両側壁のほぼ中央部で、奥壁から50cm程離れた床面から珠文鏡が1面鏡背部を上にして検出された。玄室内からの出土遺物は鏡だけである。石積みを有する墓道



第8図 遺物出土状態実測図（1/20）

右壁の壁ぎわの床面からは馬具の轡1対と木心鉄板張輪鎧が1対原位置で検出された。鎧の取りあげの際この直下から白玉が検出された。墓道入口近くの左壁ぎわからは鉄鋤先と共に一部巻きつけていたと思われる有孔円板を含む白玉が多数検出された。鋤先は一部欠損し、現存する鋤先も二つに折れており、一片は攪乱により裏がえしになっていた。

埴丘からの出土品としては須恵器と埴輪がある。埴輪の種類には円筒埴輪と形象埴輪がみられる。形象埴輪のうち家形埴輪は埴丘中央部付近、特に石室上面部の埴丘上に置かれたものと思われ、出土位置はその大半が石室埋土中からである。鶏の埴輪は西トレチのすぐ南で葺石の裾部付近出土である。現存する葺石のほぼ中ほど付近の表土除去作業中に人物埴輪の腕の一部が検出された。

須恵器では杯身、脚、器台、蓋の小片がいづれも葺石付近の遺構検出作業中に発見された。

埴輪の一部（第17図31～36）については調査中に発見されたものではないが当該埴出土品を採集している方より提供されたものをここに紹介した。

### ① 鏡（第9図、図版5、巻頭カラー）

珠文鏡であり、鏡面を下に向けて出土した。面径9.35mm。鏡面の反りは3.1mm。鏡背は鉢一珠文帯（紐通し孔を結ぶ対角線上に上・下各1個ずつ、この対角線と直交して上・下に各1個ずつの乳頭を配す。これは鉢を中心にして方形に位置する。珠文帯部分には前述4個の乳頭よりさらに小さな乳頭を58個確認したが、鋳出しが悪くて全部の数は確認できない。壹の範囲で45個数えられるためこの倍の90個は考えられよう。）外向鋸齒文帯一波文帯一外向鋸齒文帯

(75個) — 外縁となる。

縁は平線である。鉢孔には紐の一部が遺存し、鉢の頭部と外縁部の側面と前後両面に布が付着している。

② 装身具 (第10図、図版7)

有孔円板 (1) 滑石製品である。周辺は全面磨いており、一部を除いて丸くつくられる。長径24.5mm、短径23.9mm、厚さ3mmを測る。中央部分に径1.5mmの孔を有している。重量は3.5gを測る。淡灰色を呈している。

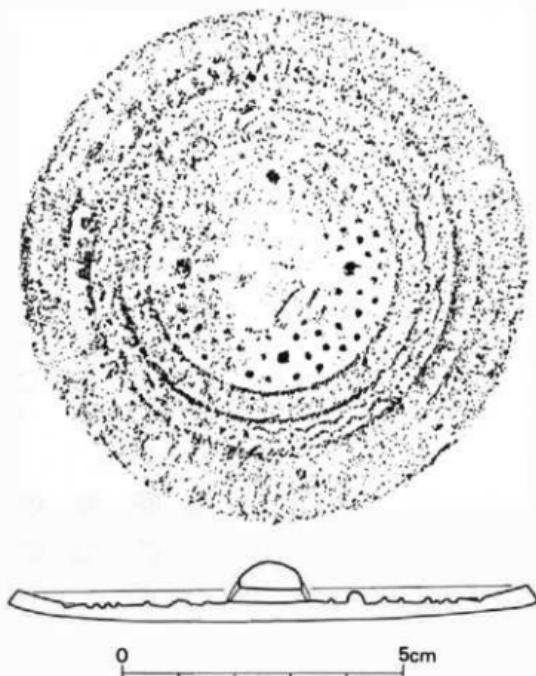
白玉 (2~77) 錐先のまわりからはおおよそ2群にまとまって出土した。A群は2~21で有孔円板を含む。B群は22~49まである。

このほかに鏡の下から50~77が出土した。A群は総じて小型で側面の中ほどにわずかに棱を有するものが多い。径は3.1~4.0mm、厚さ1.5~2.5mm、孔径は1.5mm前後である。色調は淡灰色、灰色を呈する。総数57個である。B群はA群に比して大型品であり、側面部に棱を有さない。径は3.2~4.5mm、厚さ1.9~4.1mm、孔径は1.5~1.8mmである。色調は明灰色が多いが、灰色のものも一部みられる。総数は101個である。鏡の下出土品の玉の形態はB群に似ているか? 石材は光沢があり、硬質である点が異なる。径は3.6~4.5mm、厚さ1.3~4.5mm、孔径1.3~1.8mmを測る。色調は明灰色、灰色を呈する。総数は62個である。

材質はA群、鏡の下出土品は滑石、B群は滑石に似ているかやや異なる様な感を受ける。

③ 鉄器 (第11~14図、図版7~10)

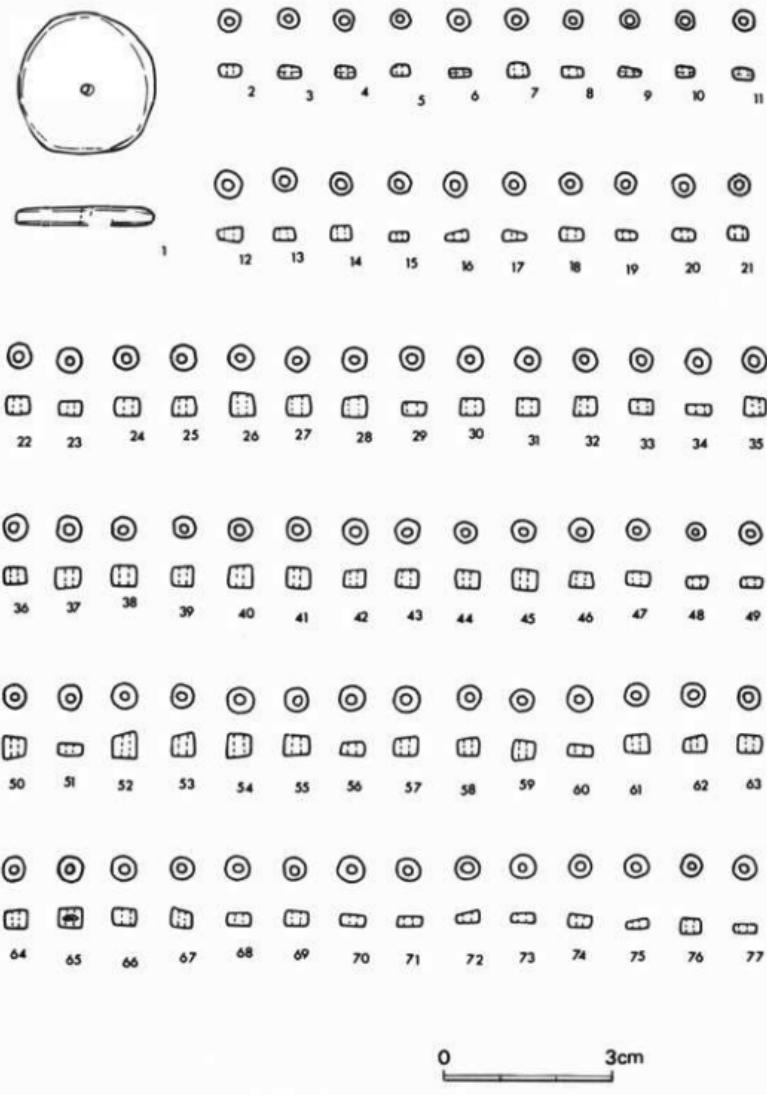
鏡 (1・2) 木心鉄板張輪鏡であり、一对出土している。木を曲げて鏡の原形をつくり、これに鉄板を張ったものである。鉄板は鏡の柄の部分と足かけの輪上半部は四面すべてに、踏込



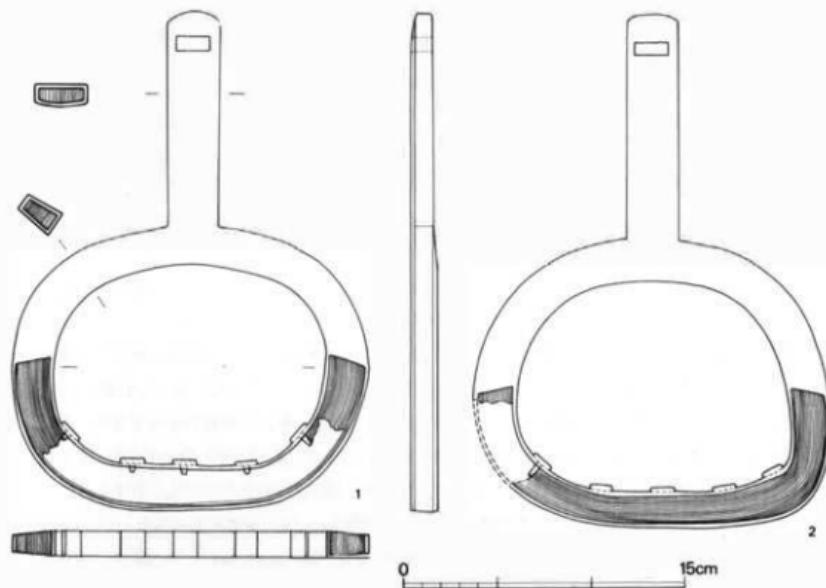
第9図 珠文鏡拓影(1/1)

0

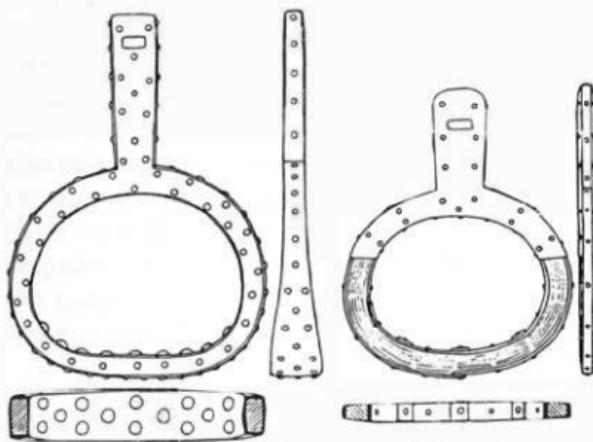
5cm



第10図 玉類 実測図(1/1)



第11図 木心鐵板張輪鋌実測図（1/3）



木心鐵板張輪鋌 (左) 長持山古墳出土 (右) 新開第1号墳出土 (1/4)

第12図 木心鐵板張輪鋌の二形式 (考古学雑誌第52巻より)

みを含めた輪下半部は輪郭となる内・外の2面にのみ張られる。従って輪下半部の前・後面は木質が露出したままである。

柄の頭部は丸くつくられており、この部分の長さはやや長い。頭部近くには鉗を受ける長方形の孔がつく。輪には踏込みがみられる。これは幅1.3cmの方形のものであり、鉄板の上から木質部へ鉢として打ち込まれており、5個つく。柄の前後面は一面は平坦であり、他面はややふくらみを有する。輪の輪郭部分の内側は外側よりも幅広くつくられている。規模は、1は全長26.5cm、2は27.3cm、輪の幅は19cm、柄長11.4cm、12.0cm、幅2.8cm、厚さ1.2cmを測る。輪の輪郭外側の幅は1cm、内側は1.45cmである。

轡（3～5）3・4は引手、5は銜の部分である。引手は断面長方形の鉄棒を曲げて2重にした形態のものであり、引手壺は長円形を呈しており、引手との境部は肩の張った形態である。現存長17.3cmを測る。引手壺は長径2.7cm、短径2cmである。銜は2連結のものであり、全長27.7cmを測る。引手に接続される銜端部の円環は、径4.1cmで、断面は径7.5mmの円形を呈する。鏡板の立聞は長方形を呈するもので、途中に長さ1.5cm、幅0.3cmの長方形の孔を有する。

鉗具（6～8）径断面5mmで円形の鉄棒をU字形に曲げ、一方に断面円形の軸をとりつける。この軸部には断面長方形の刺金がつく。本体は全長6.5cm、幅4.2cmを測る。7は軸の一部と刺金を欠損する。8の刺金部分は7とは別個体である。

円形環（9～12）2種類の大きさがみられる。一つは直径3.5cmで、断面径5～5.5mm、他は直径4.5cm、断面は一辺4.5mmの方形を呈するものである。9～11は環状部に幅2cm前後の革紐かと思われる鍍着が見られるため、革などで吊して使用したものと思われる。

釘（14～17）いづれも一端に径5.5～6mmの円形鉢をもつ。端部は本体から直角に近い角度で屈曲させている。木質は釘とは直角方形に木目が通るものであり、外方へ曲げられた端部付近にはいづれも木質は存在しない。断面は円形を呈するものである。総数7本である。

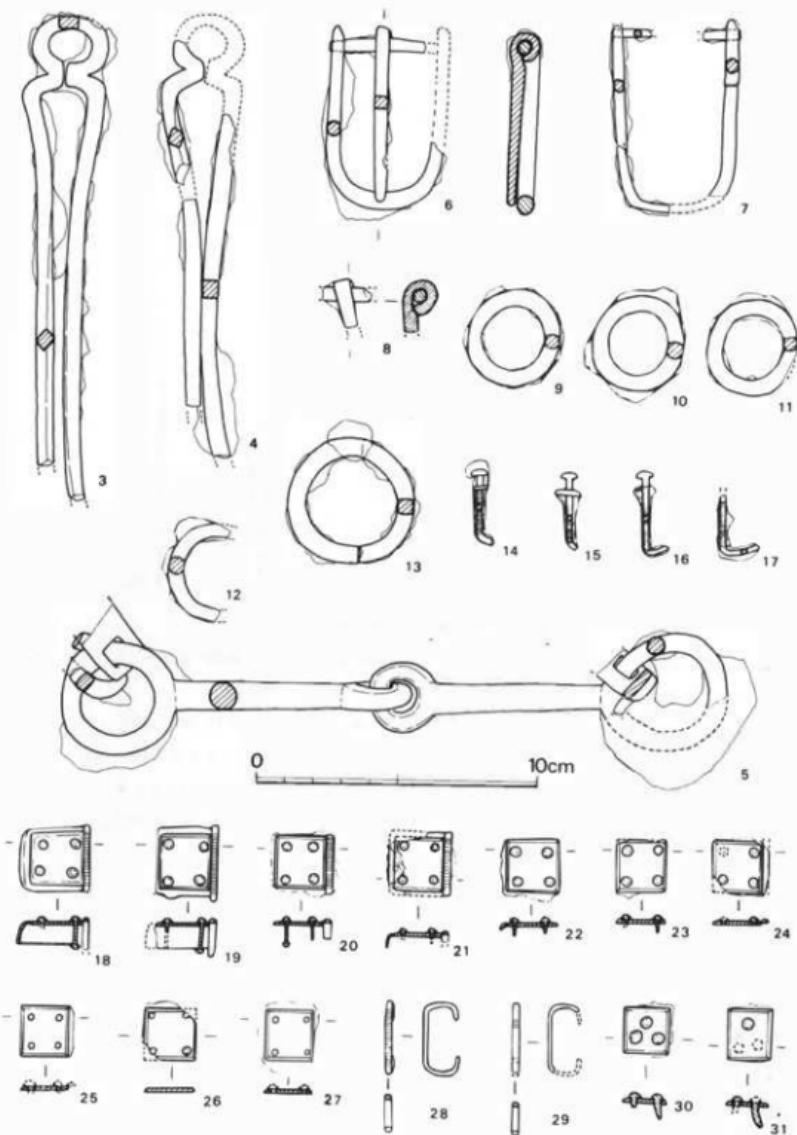
留金具（18～31）18～29、30・31の2種類に分類される。前者は総数16個体検出されている。前者は一辺1.8cmで方形を呈する鉄製の金具に銅製の鉢4個を打ちつけたものである。この鉢は端部両面に円形の鉢頭を有するものである。この金具の一辺にC字形とした金銅製の飾金具を付設する。この飾金具には刻み目が入る。この飾金具と反対方向には革製の袋部をもつ。鉢の両端間は長さ8～9mmを測り、この部分に革を挿入している。30・31は前述のものとは用途が異なるものである。これは一辺1.6cmの方形、1.6×1.8cmの長方形を呈するものの2種類がある。3鉢を有するものである。

刀子（32・33）32は細身の刀部である。33は茎部であり、木質が遺存する。

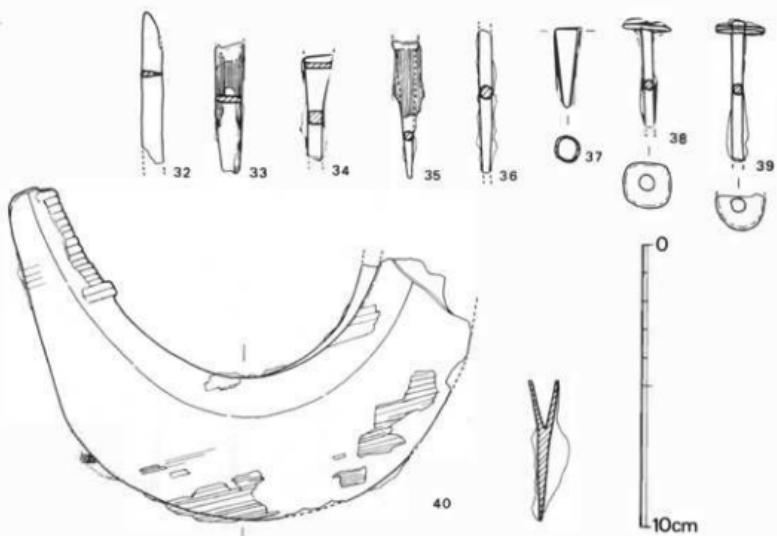
鉄鎌（34・35）34は平根の鎌である。35は茎部であり、木質が遺存する。

石突（37）小型品であり、全長2.8cm、袋部の口径8.5mmを測る。

不明鉄器（36・38・39）36は断面は円形を呈しており、鉗具の刺金とは異なる。38・39は同



第13図 鉄器実測図(1/2)



第14図 鉄器実測図 (1/2)

形態のものである。頭部には円形、隅丸方形の金具を有する。この金具の裏面には木質が遺存しており、鞍橋等に打ち込まれたものであろうか。

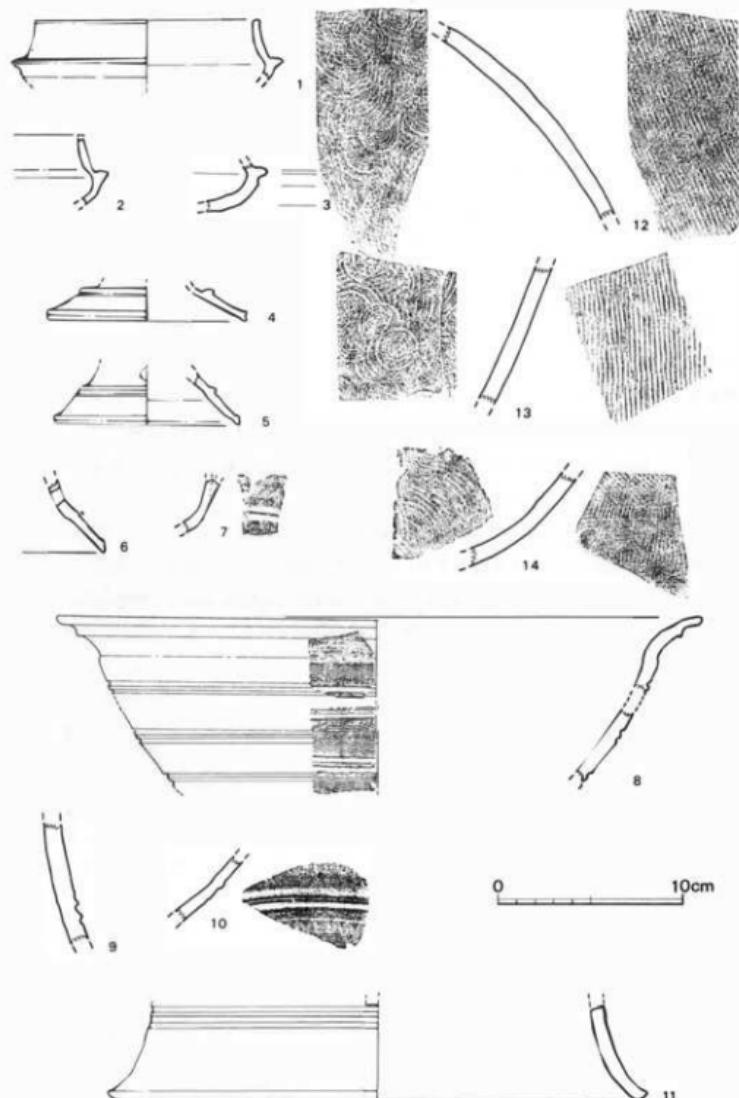
鉤先 (40) 片側の基部近くを欠損する。現存する横幅16.4cm、長さ11.7cmを測る。刀部は長さ5.0cm、木質挿入部分の内幅8mm、長さ18mmを測る。鉤先の片面には木目の粗い木質が遺存し、他の面には目の細い布目と、前述とは異なった木質が遺存している。臼玉を2ヶ所に巻きつけており、一部は鉤先に銹着して残る。したがってこの鉤先は木箱の中に布でくるんで入れられ供獻されたものであると言える。

#### ④ 須恵器 (第15図、図版10)

杯身 (1~3) 形態により2類に分類される。

I類は1・2がこれに属しており、立上りは長く、わずかに内傾するものである。口縁端部は平坦面を有し、わずかに段を有する。2は端部を欠損する。ともに体部外面は広範囲に回転ヘラ削りを施しており、他の部分には横ナデを施す。蓋受け部は平坦面を有している。1は口径12.1cm 立上り高2.1cm、蓋受け部径14.0cmを測る。色調は明灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土は良好であり、わずかに微砂粒を含んでいる。

II類は3である。立上り部分を欠損するが、基部の形態からみて立上りはかなり内傾するようである。体部は器壁が厚く、器高は低いものである。蓋受け部は外方へやや下がるものであ



第15図 須恵器 実測図 (1/3)

る。底部外面は幅が広くてシャープな回転ヘラ削りを施しており、他の部分は横ナデ調整を施す。明灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細砂粒を含んでいる。

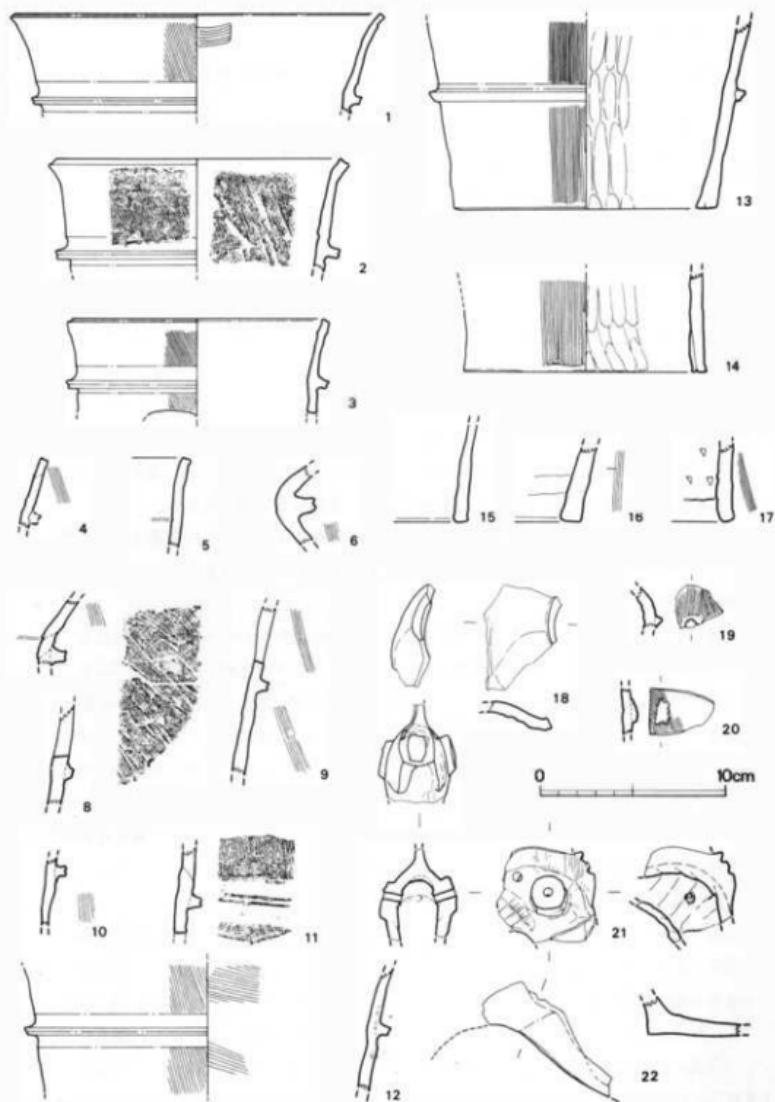
**脚部（4～6）** 4と5、6の2形態がある。4は脚裾端部上面に小突帯を配する。脚裾部と脚柱部の境には凹線が入り直上面に突帯を有している。裾部径10.7cmを測る。明灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土は精選されていて良好である。5の脚裾端部は上・下にわずかに突出させている。脚裾部と脚柱部の境には凹線が入り直上面に突帯が入る。脚柱部には径7mm程で外方から穿たれた円孔が入る。この円孔は2～3個と思われる。明灰色を呈し、焼成は良好である。胎土は良好である。6は脚裾部上面に突帯を配するものである。脚裾部と脚柱部との境付近には凹線を配し、直上部に突帯を配する。この上面には円孔を有する。円孔は4個と思われる。明灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土に微砂粒を含んでいる。

**無蓋高杯（7）** 把手を有するものである。底部と体部の境には突帯が入る。突帯部上面の把手基部付近には目の細かい櫛描波状文が入る。底部外面はヘラ削りを施し、他の部分は横ナデ調整である。杯部内面は自然釉の付着が著しい。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には微砂粒を含んでいる。

**器台（8～11）** 8は杯の上半部である。口縁部は外反して径をひろげる。口縁部直下には突帯を配する。体部には2条を単位とするシャープな凹線を3ヵ所に配する。波状文は彫りの深いゆるやかな波形のものであり3段に見られる。口縁部と内面部は横ナデ調整を施している。暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細砂粒を含んでいる。口径34.5cmを測る。9は脚柱部の小片であり、凹線を3条入れることにより2条の突帯をつくり出している。凹線下には波状文がわずかに見られる。内面は横ナデ、外面の上部は一部に斜め方向のナデを施している。暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を多く含む。10は杯部の小片である。コ字状をした頂部平坦面を有する突帯を有する。上下面には波状文を配している。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には小量の砂粒を含んでいる。11は脚裾部分である。脚端部はわずかに外方へはね上げている。上面に3条の鋭い凹線を配し、直上部分には長方形と思われる透孔が入る。脚裾径29.2cmを測る。灰色を呈し、焼成は良好である。胎土は細砂粒を含んでいる。

上述の器台は凹線の形状、波状文の形、胎土、色調などから判断して8と11、9と10はそれぞれ同一個体と思われる。

**壺（12～14）** いづれも甕胴部片である。同一個体と思われるが、全体の形状については不詳である。同一個体であっても位置によって叩きの形状、調整法は異なっている。12・13は外面平行叩き、内面同心円叩き、14は底部周辺であり、外面は平行叩き上をナデしており、内面は円弧叩きを施している。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含んでいる。



第16図 墓 輪 実 测 図 (1/6)

上述した須恵器の杯ではII類(3)の方がI類よりも古い様相を呈する。器台においては8の方が9・10よりもやや古そうである。

したがって杯・高杯・脚部・甕のすべてと器台の一部(8)を陶邑のI型式2段階、9・10の器台をI型式3段階に属すると考える。

#### ⑤ 壁輪(第16・17図、図版11・12)

##### 円筒埴輪(1~17)

普通形円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪(6)の2種類がみられる。

##### 器形の特徴

口縁部は直線的に大きく開くものと、外反度は少なくてやや垂直的に立つものとがみられる。口縁端部は平坦面を有するものと、端部上面をわずかに凹ませるものとがみられる。全形を知れるものがなかったため全長、突帯の数については不明である。突帯の長さは1~1.5cmと高く、幅は狭い。突帯の端部は平坦面をなすものは全く見られず、すべて上面を凹ませたM字形を呈するものである。ただし、M字形はさほど彫りの深いものではない。透孔は円形のものがいくつかに見られる。口径は28、32、40cmを測り、底径は26、28cmである。

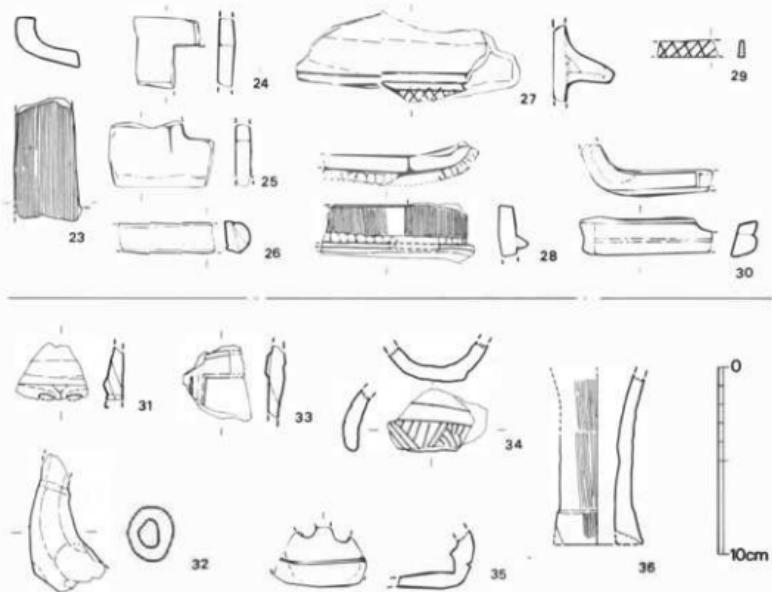
朝顔形円筒埴輪は胴部と口頸部の境に1条の突帯を配している。この突帯は胴部突帯と同じくM字形を呈しており、胴部突帯に比して、高さ、幅ともに大である。

##### 成形・調整方法

外面は刷毛目が入る。これは主として右下から左斜め上方へのものが多く見られる。幅は2cm間に7本と、2cm間に11本位のものが多い。突帯部分の下面是刷毛目調整が見られるが、4は突帯下に刷毛目は見られない。4については突帯下は接続を良くするために凹溝させている。内面はナデが主であり、1は右から左方向への横刷毛目を口縁部に施している。2は斜め方向にヘラ状器具による圧痕が見られる。13は斜め方向の刷毛目を施す。13・14は布状のものを指にあてた幅広のシャープな継ナデがみられる。底部外面は板状圧痕が見られるものがある。11と12は外面に赤色顔料を塗っている。色調はいづれも黄褐色を呈しており、焼成は良好であるが器壁の内面は灰黒色を呈している。胎土には多量の砂粒を含んでいる。

##### 形象埴輪(18~36)

人物(18・31~33)18は調査時に31・32は調査以前の採集品である。18は肩から腕にかけての部分である。31は顔の一部であり、鼻から額にかけての部分である。目の上方1.8~3.6cmの間は接合面の痕跡を有しており、頭部には冠、もししくは帽子をかぶっていたものと思われる。目尻はわずかに上方を向く。鼻の中央部は稜線を有し、鼻筋が通っている。黄褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含んでいる。32は腕から手首にかけての部分であり、手首の形態などから左手と判断がつく。手首には幅1cmのえぐり面が一周している。断面は楕円形を呈した中空のものである。全面にナデ調整を行っている。33は腰の部分であり、腰紐



第17図 塙輪実測図(1/6)

を結った状態を表わしている。

鶴 (21) 頭部のみ検出された。鶴冠の突起は3個しか現存せず、前面部を欠損しているが、あと4~5個を有するほどの剥落痕がみられる。のど前面の肉垂基部が残り、これも表現されていたことがわかる。目は外方からの穿孔による径9mm程の円孔で表わす。耳は径3.6cm、厚さ1cmほどの粘土円板を貼付し、貼付後に外方からの穿孔による径9mm程の円孔をあける。右耳の円孔は中央になくやや上方に位置している。顔面の外面は概方向の刷毛目調整を施している。

家形埴輪 (22~30) 1個体分が検出されているが、いづれも接合しない。22は屋根の破風であり、かなり大型になりそうである。27は壁の部分であり、2階家の埴輪の1階と2階の境部である。1階の壁上面にはヘラ線刻による斜格子文を配している。1階の壁面にはあらかじめ作業印の線刻を入れて長方形の窓をあける。23~26、28~30は壁部分である。23は壁のコーナー部分であり、コーナーはやや丸身をもつていて、直角にまじわらない。コーナー両側には窓を開けている。25は壁であり長方形の窓を有する。28は壁のコーナー部であり、外面は刷毛目を施し、赤色顔料を塗っている。

馬（35・36）35は馬面の口と鼻の部分である。口は幅2mm、深さ5mm程の溝を彫って馬の口としている。36は足の部分であり、蹄を表現している。外面は刷毛目を施す。

青（34）前後いづれかの底部である。ヘラによる線刻を入れる。

#### (4) 小 結

##### ① 須恵器について

葺石周辺部からは小数ではあるが、古式の須恵器が出土した。器種は、杯身、高杯、器台、甕である。

杯身は2型式のものがみられる。3は立ち上りが内傾し、体部は浅いものであり、陶邑I型式<sup>(注1)</sup>2段階に属するものと思われる。1、2の杯はI型式3段階に属するものであろう。高杯の脚部4～6はいずれも同一時期のものである。脚裾部から脚柱部の間に1条の凸線を有する形態はI型式1段階及び2段階にみられるものであり、1段階に比して2段階はやや甘い凸線となっている。当該出土の脚部は1条のやや甘い凸線を有し、脚裾部の形態等からも2段階に属するものと判断できる。器台の8と9・10を比較すると、8は凸線をもたないがシャープな凹線が入る。9・10は甘い後のものであり、時期差としてとらえられよう。8はI段階2型式9・10は3型式に属すると思われる。

従って、古墳の築造年代はI型式2段階の時期と思われ、3段階の土器は追葬時の供献土器として考える。

##### ② 馬具について

石積みを有する墓道の右壁ぎわの床面から鎧、轡、銃具、留金具などの馬具が原位置を保って出土した。

鎧は木心鉄板張輪鎧であり、良好な遺存状態で1対出土している。この木心鉄板張輪鎧の形態は

- ① 柄の頭部が丸くつくられている。
- ② 柄の長さはやや長めである。
- ③ 輪の上半部分と踏込みの部分とは同じ幅で、同じ厚さに作られている。
- ④ 輪の断面形をみると、輪郭部は内側の方が外側よりも厚くつくられていて台形を呈する。
- ⑤ 鉄板は柄と輪の上半部は四面に、下半部は輪郭部分の2面にのみ用いていて、前後面には鉄板を張っていない。

（注2）小野山節氏は、木心鉄板張輪鎧を2形式に分類している。第1形式は「輪鎧の柄が比較的太く短くて、柄の頭が丸く形づくられており、輪の上部すなわち柄につながる部分と踏込の部分とが同じ厚さで同じ幅に作られていて、前後の面が柄と輪の接合部だけに鉄板をあてるという特徴をもっている。」第2形式は「輪鎧の柄が細長く、柄の頭が角ばる形につくられて、踏込の

部分が輪の上部よりずっと厚くなっている。幅は逆に少しせばまっている。四面全体を鉄板でおおったものが多い。」としている。さらに第1式が古式で、第2式が新式の木心鉄板張輪鎧であるとしている。新式の2式にともなう他の馬具類の検討から古式（第1形式）の輪鎧の使用された年代を5世紀前半を中心とする年代に、新式（第2形式）の輪鎧の使用された年代を5世紀中頃に比定している。

当該墳出土品は柄がやや長い点を除けば第1形式の特徴を全て有するものであり、滋賀県新聞第1号墳出土の輪鎧と形態の共通点が多く基本的には第1形式に属するものといえる。柄の長さについては第2形式に近いが、柄頭部が丸い点が、1形式に属する。1・2形式最大の相違点である、踏込み部の厚さが輪上部に比して同じである点からも、第1形式と考えてよからう。ただし柄の形態、長さを問題にするならば第1と第2形式の中間形態とも言える。

引手の形態は一本の鉄棒を2つ折りにして2条線とし一端に円形の引手壺を彫づくったものであり、通有の引手の形態と異なっている。この2条線の引手を有するのに熊本県船山古墳出土品がある。ただし、船山古墳出土の鎧は鉄製輪鎧である点、当該墳出土品より後出するものと考えられる。

#### ③ 石室について

内部主体は竪穴系横口式石室であり、墓道には石積みの側壁を有する。石室の平面形は長方形を呈し、奥・両側壁はすべて片岩の平積みによるものである。

初期のものとしては5世紀初頭に比定される福岡市老司古墳があげられる。この横口部には棚状の施設を有して横口上方部からの追葬形態をとるものである。当該墳の東方1kmに所在する広川町石人山古墳は、横口を有する長方形プランの竪穴系横口式石室であり、内部に横口式家形石棺を納めている。<sup>(註3)</sup> 八女市立山山古墳では当該墳とほぼ同時期の4基の竪穴系横口式石室が検出された。石室の平面形はいづれも長方形を呈し、墓道には石積みもしくは板石による側壁がみられる。石材の用い方は本墳とは異なっており最下段のみ板石を立てて用い、2段目からは片岩の平積み方法をとっている。これらは5世紀中葉から後半に比定されている。このようにこの時期の竪穴系横口式石室の構造はバラエティに富んでおり、細部の特徴による時期区分は困難のように思われる。

#### ④ 年代について

木心鉄板張輪鎧は小野山節氏の1型式に属するものであり、これは初現を5世紀前半に比定している。2型式の輪鎧は5世紀後半以後に出現するとされている。当該墳出土の木心鉄板張輪鎧は柄の長さだけが2式に近づくが、全体の特徴は1式そのものであり、これを1式の過渡的な形態としてとらえることができ、当該墳出土輪鎧は遅くとも5世紀中頃には位置づけられよう。

石室の構造では、八女市立山山古墳群にみられる竪穴系横口式石室を有する23・25・27号墳

は当該石室より規模はやや小さいが、平面形態は共通した構造のものであり、本墳とは相前後して築造されたものと思われる。立山山23・25・27号墳は5世紀中葉から後半の古い墳に比定されている。

埴輪では突帯はまだ細身であり突帯の頂部を凹ませており、やや甘い感じを受けるが、いわゆるM字形をした突帯である。これは石人山古墳出土の埴輪が突帯は長く、頂部を凹ませた彫りの深いM字形をした形態であるため、これよりは1時期を画する必要があろう。したがって埴輪の形態からは石人山古墳に次ぐ時期に比定されよう。

須恵器では杯身の一部と高杯、器台の一部において陶邑のI型式2段階に属するものが見られる。須恵器の生産開始期である陶邑I型式1段階の年代については4世紀末～5世紀初頭、<sup>(註4)</sup>5世紀前半代、5世紀中頃、5世紀後半と論の分かれる所である。また最近では福岡県甘木市池の上、古寺墳墓群の調査で多数の陶質土器や古式須恵器が出土し、須恵器の生産開始時期を5世紀前半代の前半に比定する説が出て、大きな関心を呼んでいる。ここでは木心鉄板張輪鏡等の年代を考慮して、I型式2段階を5世紀中頃に比定する。

上述のことから瑞王寺古墳は5世紀中頃の築造になるものであり、従来から5世紀中頃～後半に比定されている石人山古墳との前・後関係が問題になるが、石人山古墳出土の土器や埴輪から、石人山古墳の築造が一時期古いと思われる。

- 註1 大阪府教育委員会『陶邑II』大阪府文化財調査報告書30 1978  
2 小野山節「日本発見の初期の馬具」考古学雑誌 第52巻 第1号  
3 八女市教育委員会『立山山古墳群』八女市文化財調査報告書 第10集 1983  
4 甘木市教育委員会『池の上墳墓群』甘木市文化財調査報告書 第5集 1979  
5 " " 『古寺墳墓群II』 " 第15集 1983

## 付編 石人山古墳出土遺物

石人山古墳の前方部南側は約20年前に一部開墾されており、この時出土した多数の遺物のうち一部をここに紹介する。この遺物は筑後市在住の木下恒夫氏が採集されたものであり、今回、氏の御好意により譲渡されたものが多い。

採集遺物は陶質土器、埴輪の貴重品である。

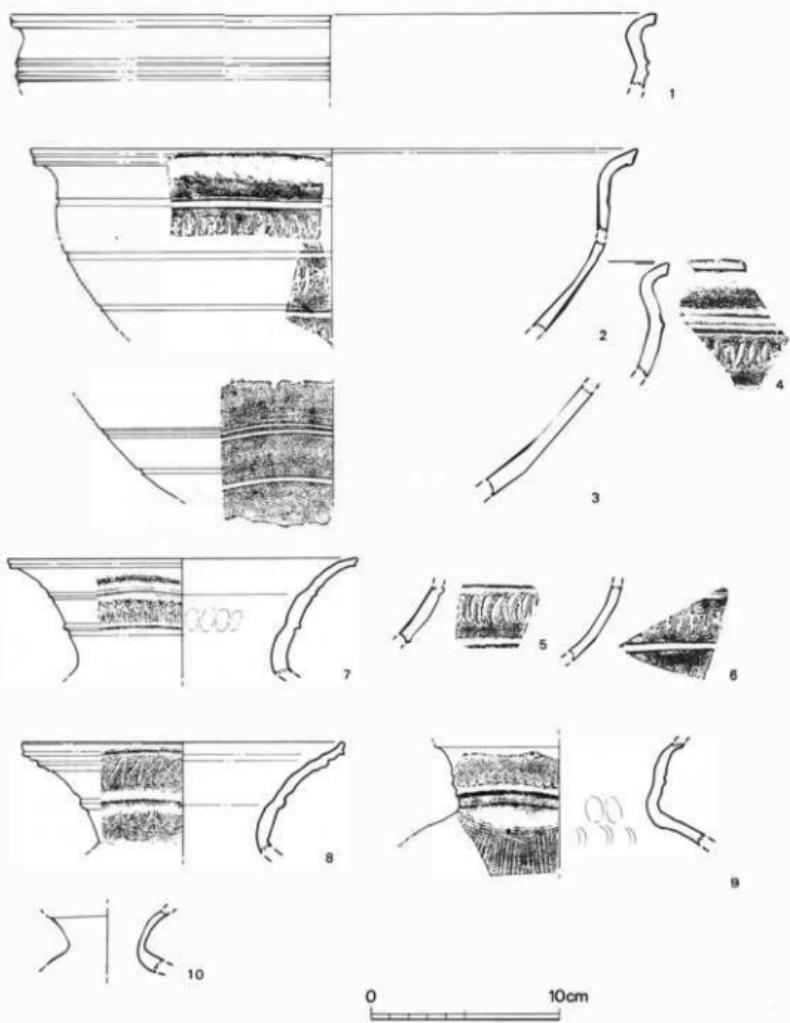
陶質土器には器台、壺、甌がある。埴輪は円筒埴輪、形象埴輪（家、盾、男根）である。

家形埴輪については九州歴史資料館で復原し、写真を掲載した。

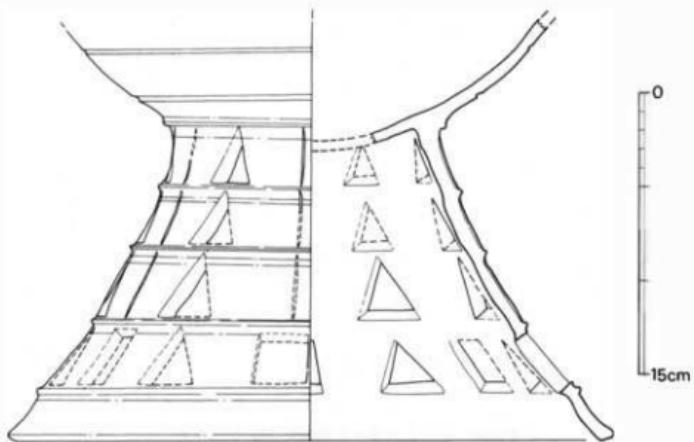
陶質土器（第18・19図、図版14）

器台（1～6・11）2の器台口縁部は杯部から弯曲して外反しており、口唇部にはやや棱の甘い凹線を配する。杯部には3条のシャープな凹線を一定間隔で配しており、この間に彫りの深い櫛描き波状文を施している。内面は横ナデ調整である。口径は31.8cmを測る。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には微細粒を含む。杯部内面には自然釉が付着している。1は短く外反する口縁部を有しており、口唇部には棱の甘い凹線を配する。口縁部下には2条の三角突帯を配しており、突帯の下面部には波状文を施しているのがわかる。内外面とも横ナデ調整を施す。灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細砂粒を含んでいる。口径33.8cmを測る。3は短く外反する口縁部を有し、口唇部には棱の甘い凹線を施す。口縁部下には2条の三角突帯を配し、突帯の下面部には彫りの深い波状文を施している。暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細砂粒が多く含む。内面は自然釉が付着する。4は杯部の下面部である。2ヵ所に沈線を配するが上方のは2条である。この沈線で挟まれた間には波状文を配する。内面はスリ消し状のナデを施す。明灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には若干の小砂粒を含んでいる。5、6は杯部の小片である。5は三角突帯を配し、突帯間に波状文を配する。6は凹線を配し、凹線間に波状文を配する。11は器台の脚部である。杯部を欠損する。透孔は縱一列に三角形透孔が4段に入る。三角形透孔どうしの間には上3段にヘラ描きの線刻が縱一列に並び、下段部には方形透孔を配する。各段には丸味をもった細線状の突帯を入れている。杯部底外面は平行叩きを残す。脚部内外面は横ナデ調整を施す。杯部内面はスリ消し状のナデを施す。底径32cmを測る。灰色を呈し、焼成は良好である。胎土は良好である。

壺（7～9）7は弯曲ぎみに外反する口縁部を有しており、口唇部に沈線を配する。頸部には2ヵ所に各1条の三角突帯を配し、この間に波状文が入る。内外面とも横ナデ調整しており、内面は段を有する。内面の頸基部近くは指頭ナデの圧痕がみられる。暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の小砂粒を含む。口径は18.4cmを測る。8は口縁部下と頸部中ほどに三角形状の突帯を配し、口頸部全面に目の細い波状文を配している。内外面とも横ナデ



第18図 石人山古墳出土陶質土器実測図 (1 / 3)



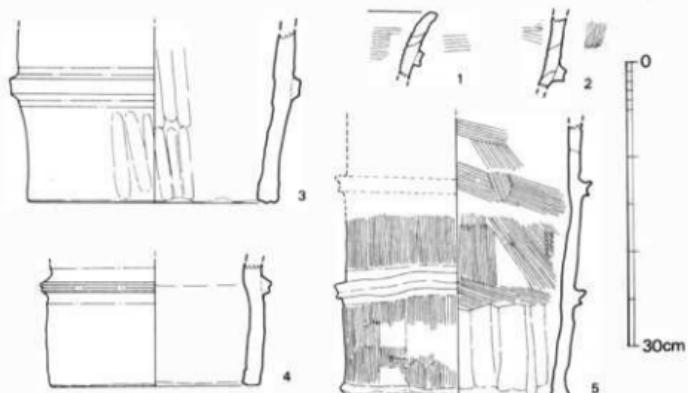
第19図 石入山古墳出土陶質土器実測図（1/3）

調整を施す。暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には微砂粒を含んでいる。内面には自然釉が付着する。口径は17cmを測る。9は口縁部を欠損する。頸部中ほどに1条の棗の甘い三角突帯があり、突帯上面には波状文が入る。胴部外面は平行叩き上を横ナデし、内面は同心円叩き上を横ナデする。頸基部内面は指頭圧痕がみられる。明灰色を呈し、焼成は良好である。胎土は精選されていて良好である。

甌（10）頸部と胴部の一部である。頸部には目の細かい波状文が入る。内外面とも横ナデ調整を施す。暗灰色を呈し、焼成は良好である。胎土は良好である、胴部外面は自然釉の付着が著しい。

#### 埴輪（第20図、図版14）

円筒埴輪（1～5）1は口縁部である。口縁部下4cmの位置にM字形突帯を有する。外面部は突帯上方には横方向のヘラ研磨を施す。内面部にも横方向のヘラ磨きをし、他の部分は横ナデ調整である。赤褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含んでいる。2は須恵質の埴輪である。内面は斜め方向に幅の広い溝を有するヘラ磨きを施す。黄褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。3は突帯下の外面に長めの指頭ナデが縱方向に入る。内面は全面に2段にわけて縱方向の指頭ナデを施す。黄褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含む。底部には板状圧痕がみられる。底径26cmを測る。4はM字形の突帯が付く。器表は剥落しており、調整法は不明である。明黄褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含む。底径22cmを測る。5はM字形の突帯が2段確認される。突帯頂部を凹窓させており棗はするどい。3段目には円形透孔が入る。調整法は外



第20図 石人山古墳出土埴輪実測図（1/6）

面では1段目は幅の広い縱方向の面どりが行なわれており、上面に縱刷毛目を施す。2段以上は縱刷毛目である。内面は1段目は縦ナデ後縱刷毛目を施し、2段目からは斜め方向の刷毛目に入る。一部に横刷毛目を用いる。底部は板状圧痕を遺存する。色調は黄褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含む。底径は24.5cmを測る。

#### 陶質土器の年代について

石人山古墳出土の陶質土器の形態は、口唇部の下端が上端より内にあり、中央部に甘い凹線が入る。この凹線はII式のそれのシャープさがなく古式のなごりを残した形態と思われる。器台の杯部は三角突帯ではなく、シャープな凹線を入れている点でII式よりは後出するものと思われる。器台の脚部ではII式は三角形の3段透しが入る丈の低いものであるが、石人山古墳出土のIIは4段透孔で脚がやや長くなる。

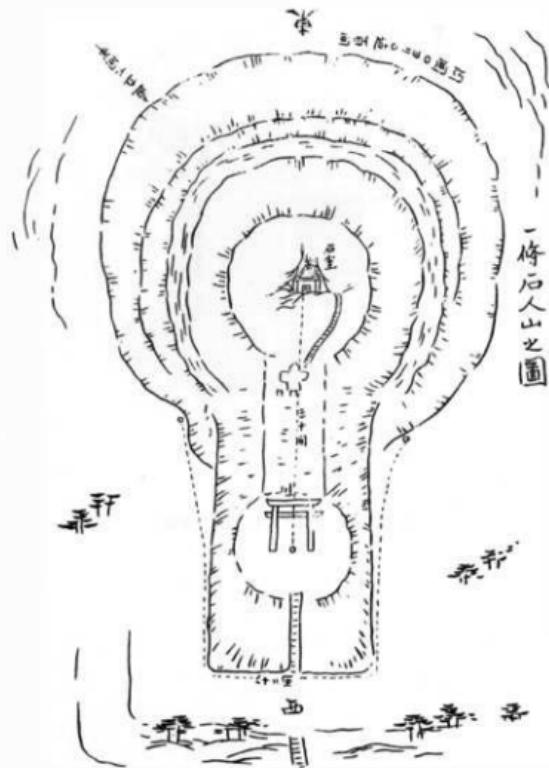
以上の如くの形態の特徴から石人山古墳採集の陶質土器は池の上III式の範疇に含まれるものである。最近またいくつかの土器が当該墳から新たに採集されており、これらは陶質土器、古式須恵器である。したがって、ここに紹介した資料は石人山古墳築造時の最古の土器と考えて良い。

前述の瑞王寺古墳出土品は陶色I型式2段階に属するものであり、馬具・鰐先・白玉・埴輪などの出土品から実年代を5世紀中頃に比定したが石人山古墳出土土器はこれよりは古い型式の土器であることはうたがう余地はない。したがって從来言られてきた年代を修正する必要があると思われる。

- ・墳丘は前方部が低く、幅のせまいものである。

- ・北側のくびれ部には造り出しをもうけている。(通説であるくびれ部の造り出しの初現を5

- 世紀初頭とすれば、当該墳はこれと同時期か、それ以後となる)
- ・後円部には前方部に向けて開口する竪穴系横口式石室があり、内部には横口式家形石棺を納めている。
  - ・池の上III式の陶質土器を出土している。
  - ・埴輪は、5世紀中頃に比定する瑞王寺古墳よりも古い形態を有する。
- 以上の点などから石人山古墳採集陶質土器の年代を5世紀前半代（前半代でも後半に近い時期）に比定し、この時期を石人山古墳の築造時期と考える。



第21図 筑後將士軍談にみる石人山古墳

廿木市古寺墳墓群IIでは橋口達也氏は池ノ上III式を5世紀前半代の前半に比定しており、若干のギャップがある。したがって、この点をどのように解決して行くかは今後の問題としておきたい。



第22図 石人山古墳出土車形埴輪

# 図版



瑞王寺古墳発掘調査前全景



瑞王寺古墳発掘調査後全景



瑞王寺古墳墳丘・蓋石



瑞王寺古墳蓋石

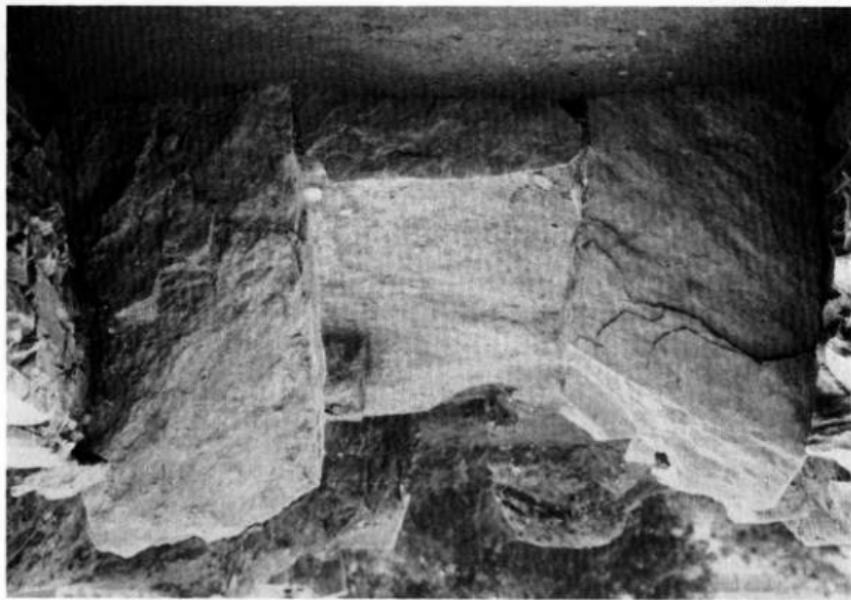
瑞王寺古墳石室全景（南から）



瑞王寺古墳石室全景（北から）



图版 4 球王寺古建筑口部

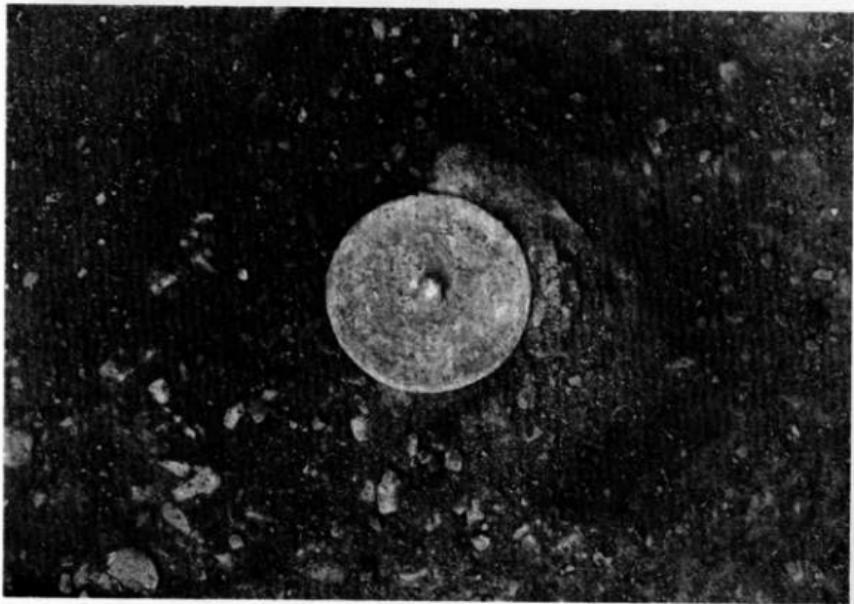


球王寺古建筑壁





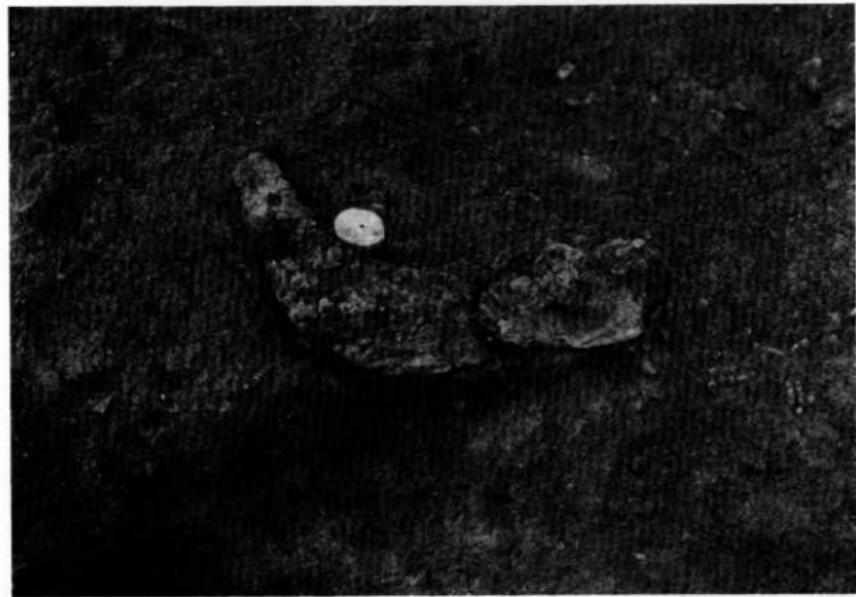
墓道右側壁の石積み



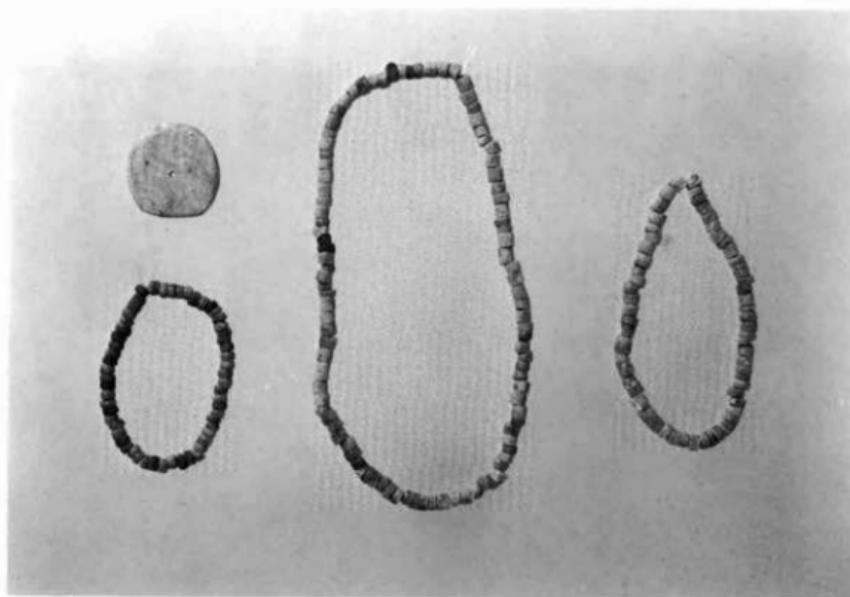
珠文鏡出土状態



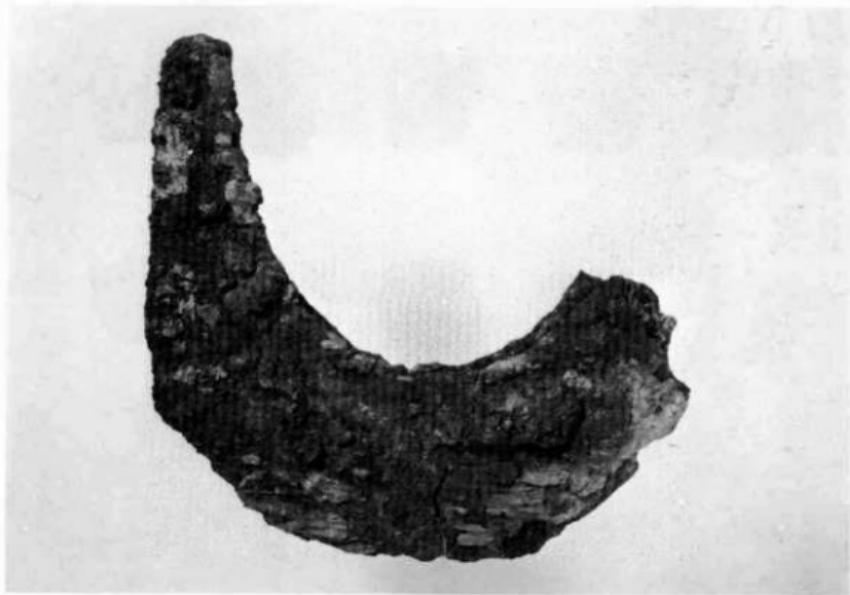
馬具出土状態



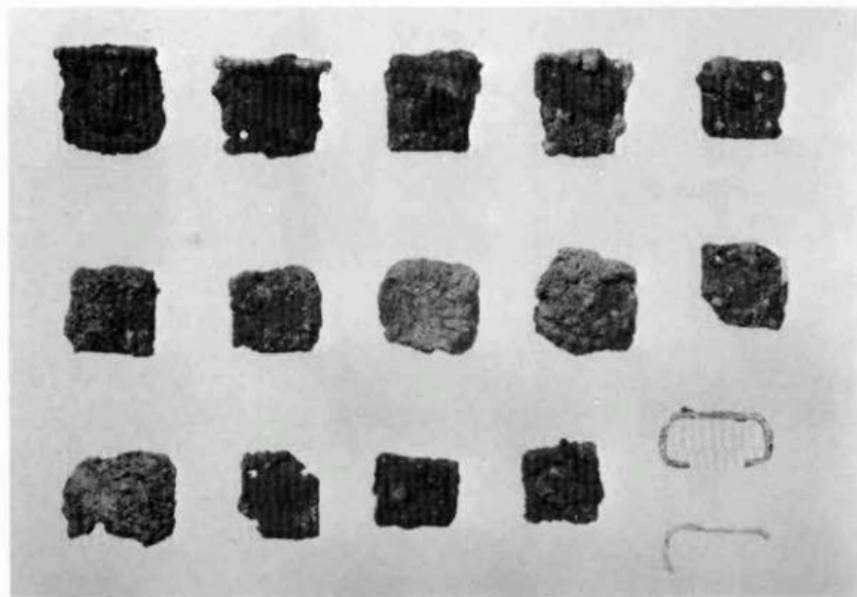
銳先、有孔円板、白玉出土状態



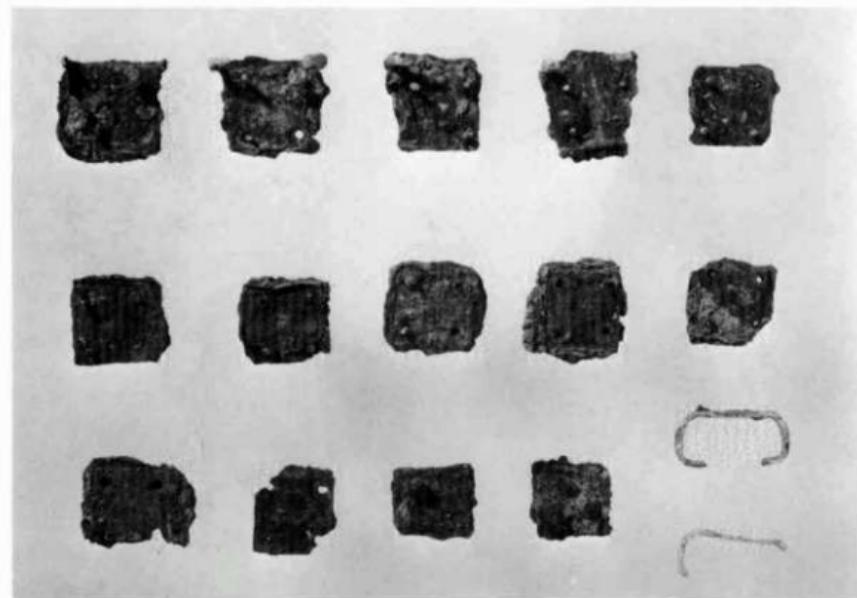
有孔円板、白玉



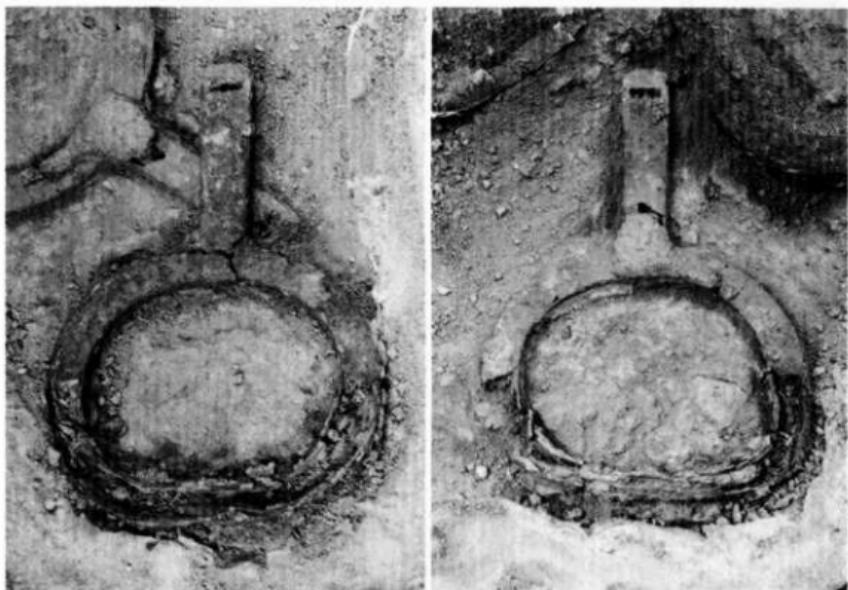
錫 先



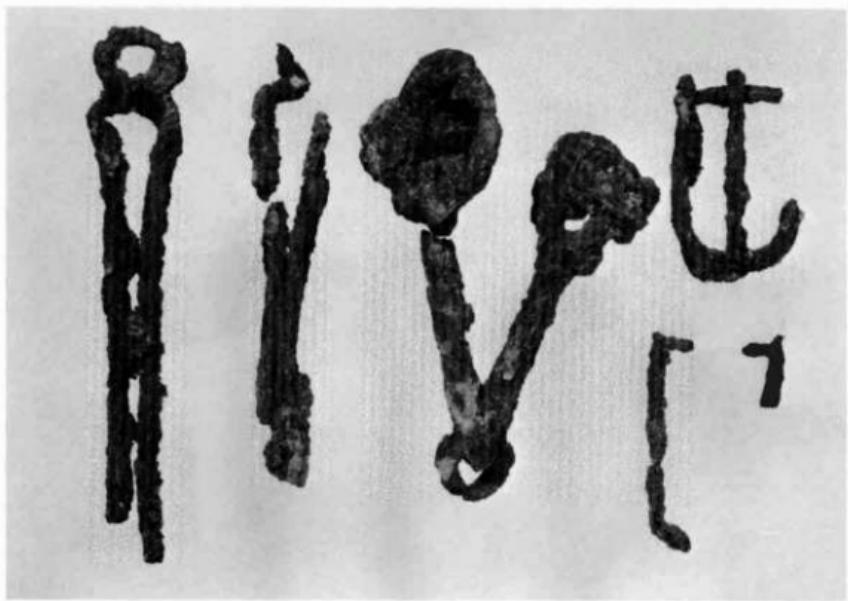
留金具（表面）



留金具（裏面）



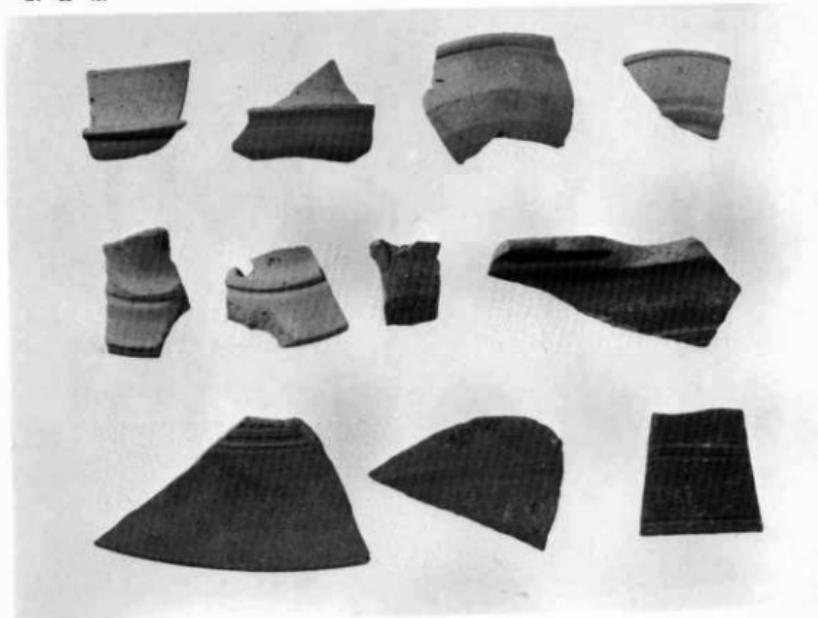
木心鐵板張輪證



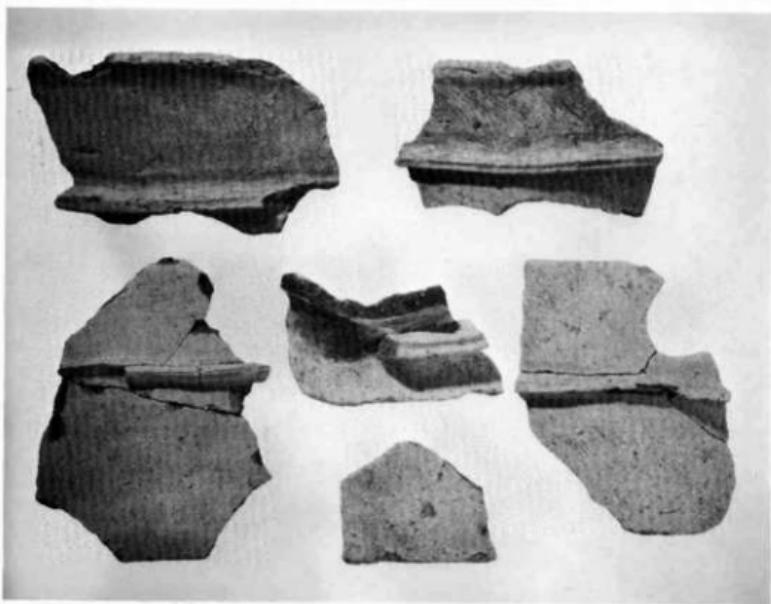
鬯·鉸具



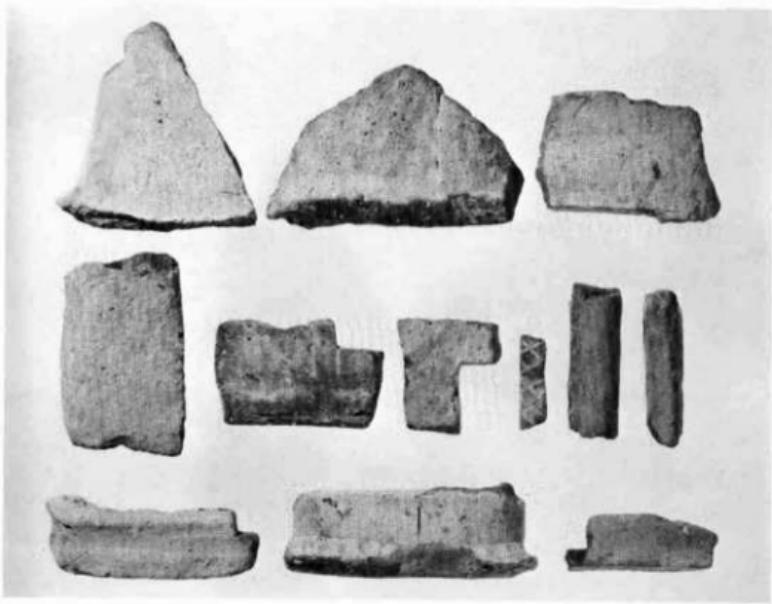
鐵器類



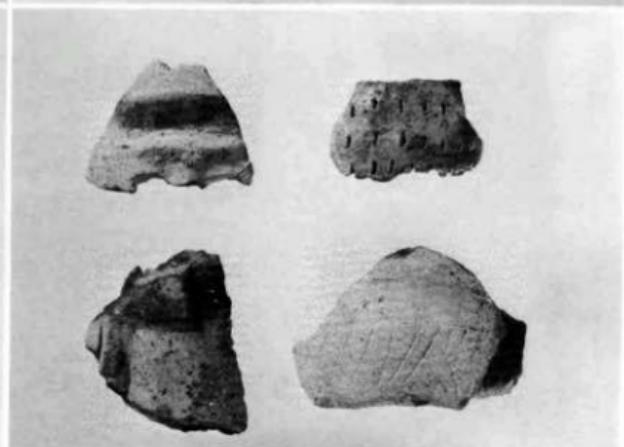
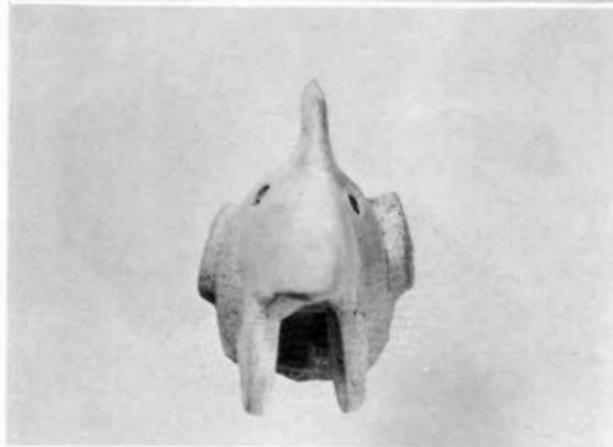
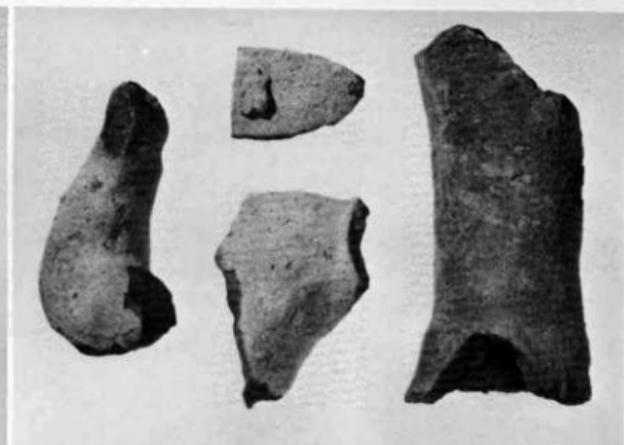
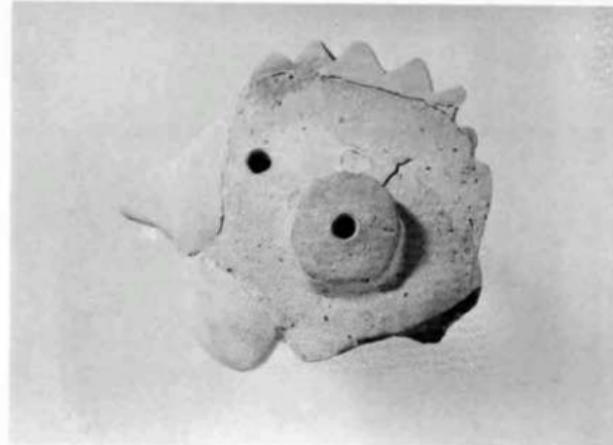
須惠器



瑞王寺古墳出土円筒埴輪

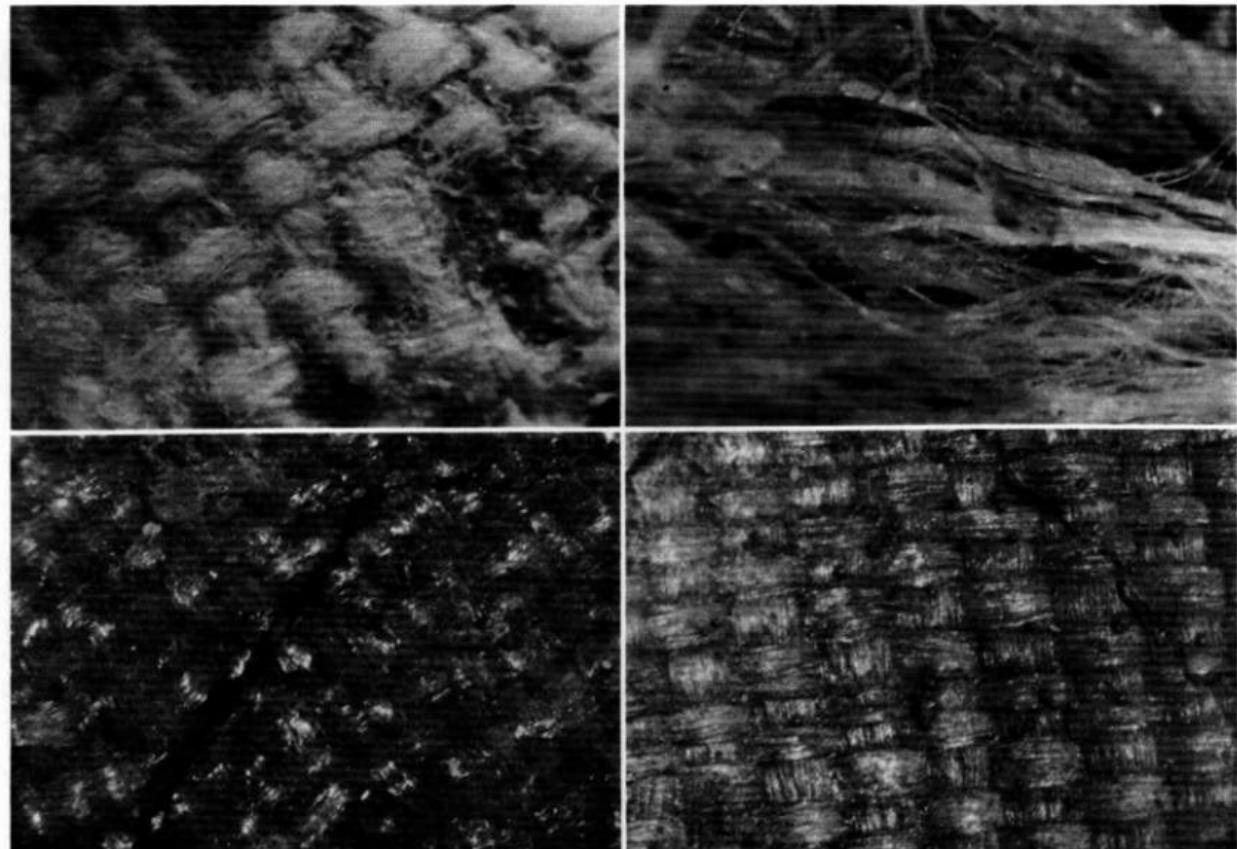


瑞王寺古墳出土形象埴輪

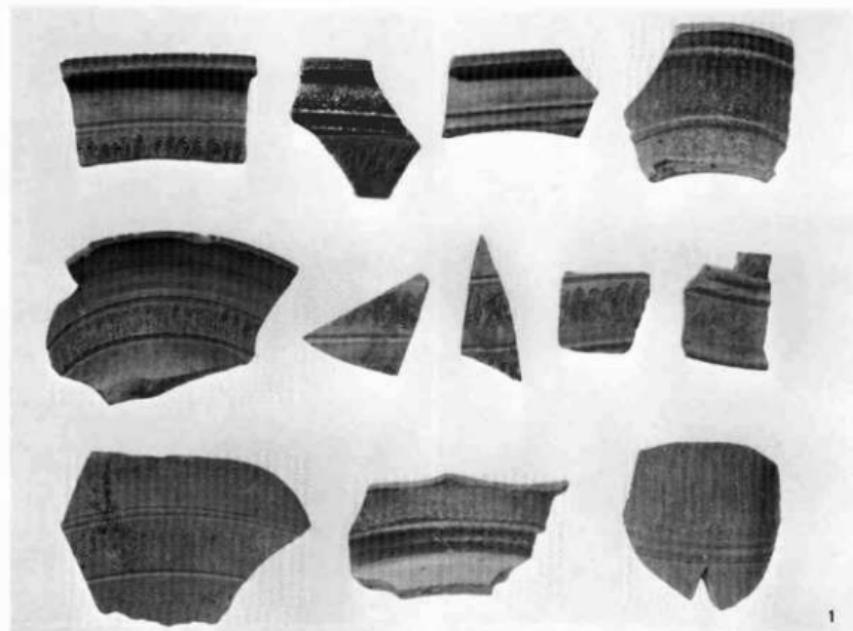


瑞王寺古墳出土鶴の埴輪（上・下）

瑞王寺古墳出土形象埴輪（上・下）



布・紐の顕微鏡写真（左上 鏡に付着した布、右上 鏡の紐に遺存した紐、左・右下 鏡先に付着した布）



1



2

1. 陶質土器  
2. //



3



4

石人山古墳出土陶質土器・埴輪

瑞王寺古墳

筑後市文化財調査報告書  
第 3 集

昭和 59 年 3 月 31 日

発行 筑後市教育委員会  
筑後市大字山ノ井 898

印刷 青柳工業株式会社  
福岡市中央区渡辺通 2 丁目 9 の 31